

開会あいさつ

井形 昭 弘
(鹿児島大学長)

本日は鹿児島大学南方海域研究センターの主催による「フィリピンの宗教と社会」というシンポジウムを催しましたところ、多数ご参加いただきまして心からお礼申し上げます。ご承知のように、鹿児島大学は1981年から南方海域研究センターという総合性を発揮する共同研究の核を持っておりまして、今年で7年経ったわけではありますが、ほぼ同じ内容でさらに10年間存続することが決定しております。そういう意味では、今日のシンポジウムのテーマはこれまでの7年間の研究活動の総括であり、かつこれからの研究の出発点であるということができると思います。とくに、今回のシンポジウムにあたって選ばれたテーマは、先日、文部省に行きました時にポスターがはってありまして、かなり関心が高いということを知り、私は非常に嬉しく思いました。

私自身も医学部におりました時に、フィリピンのサント＝トマス大学、これはカトリックの大学であり、アジアで最も古い大学でもあります。その大学の医学部からロサレスさんという留学生がおみえになっておりました。私もマニラをはじめ、フィリピンには8回程行ったことがございます。そういう意味では私自身にとっても、今日のシンポジウムのテーマは非常に関心が深いものでございますし、南方海域研究センターの研究活動の一つの大きな柱でもございますので、いろいろなことを勉強したいと思っております。

このような人文科学の研究が今後、研究の総合性を確立する上で大きな力になって、ますます鹿児島大学の特徴を発揮し、そしてまた近隣諸国との友好関係が発展することを心から切望して、簡単でございますが、私のごあいさつにかえたいと思います。ご参加くださった演者の先生に厚くお礼申し上げます。どうか最後まで十分、この成果を皆さんで盛りたてていただきたいとお願い申し上げます。ありがとうございました。